



新編之事

特別  
イ 4  
3163  
86





二千あやうわうよ切あ筆在之筆

一あよめふとてさつらくはひにあまらう一にんよ  
 てさつらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらう  
 法徳なるらうらうらうの杖のきりては毒のトコ  
 か二の匂てきれぬるや

是にてまごゆらん物と数さうぢわるふしは袖のきり  
 中あまての筆うらうののちり中あまてさ  
 ろくうらうらうらうらうの紙格ちり  
 一しうらうの筆うらうく可かぎ知筆てこつ院

如字之事

其月乃結る紙の巻るうらうらうら





一 かりりうの半一字子金の在割はは  
二十二ぬみ字を半

さかづののりくぬみまのうへと推して清よ  
よしくしてまてのまされのお経門もあし  
まよに流よ付けしはし一あか被積のどたは  
おあししてされは何のせようし一初句の  
そんたしはるかち一ふ書一作りを  
よこののらよのそみすはそらるる  
うよとて作りしは流た二  
かりとあしきしてし

ぬかりりうの半一字子金の在割はは  
さかづののりくぬみまのうへと推して清よ  
よしくしてまてのまされのお経門もあし  
まよに流よ付けしはし一あか被積のどたは  
おあししてされは何のせようし一初句の  
そんたしはるかち一ふ書一作りを  
よこののらよのそみすはそらるる  
うよとて作りしは流た二  
かりとあしきしてし

ぬかりりうの半一字子金の在割はは  
さかづののりくぬみまのうへと推して清よ  
よしくしてまてのまされのお経門もあし  
まよに流よ付けしはし一あか被積のどたは  
おあししてされは何のせようし一初句の  
そんたしはるかち一ふ書一作りを  
よこののらよのそみすはそらるる  
うよとて作りしは流た二  
かりとあしきしてし

わらひをうらむ事

二十二ぬみ字の可有周捨河と年

一わらひのぬみ字承久二年八月十日の相定を判  
末句不懸合とてうれとてうらむ又承久年九月  
十三日相定判のぬみ字承久二年八月十日の相定を判  
之のすすくわらひをうらむぬみ字承久二年九月  
十日の相定判のぬみ字承久二年八月十日の相定を判

一わらひのぬみ字承久二年八月十日の相定を判

わらひのぬみ字承久二年八月十日の相定を判

一月わらひのぬみ字承久二年八月十日の相定を判

わらひのぬみ字承久二年八月十日の相定を判

つくと 是又ぬみ字承久二年八月十日の相定を判

さりと 是又ぬみ字承久二年八月十日の相定を判

わらひのぬみ字承久二年八月十日の相定を判

わらひのぬみ字承久二年八月十日の相定を判

わらひのぬみ字承久二年八月十日の相定を判

わらひのぬみ字承久二年八月十日の相定を判

わらひのぬみ字承久二年八月十日の相定を判

わらひのぬみ字承久二年八月十日の相定を判

二十四 ぬみ字承久二年八月十日の相定を判

一系極長門庭割のぬみ字承久二年八月十日の相定を判  
くみぬみ字承久二年八月十日の相定を判











おのれをいへばかきあはる用捨すべしとて  
かきあはるべしとていへばかきあはるべしとて  
かきあはるべしとていへばかきあはるべしとて  
かきあはるべしとていへばかきあはるべしとて  
かきあはるべしとていへばかきあはるべしとて  
かきあはるべしとていへばかきあはるべしとて  
かきあはるべしとていへばかきあはるべしとて  
かきあはるべしとていへばかきあはるべしとて  
かきあはるべしとていへばかきあはるべしとて  
かきあはるべしとていへばかきあはるべしとて

いさふ不審成の屋み字成をぬらふ  
かきあはるべしとていへばかきあはるべしとて  
かきあはるべしとていへばかきあはるべしとて  
かきあはるべしとていへばかきあはるべしとて  
かきあはるべしとていへばかきあはるべしとて  
かきあはるべしとていへばかきあはるべしとて  
かきあはるべしとていへばかきあはるべしとて  
かきあはるべしとていへばかきあはるべしとて  
かきあはるべしとていへばかきあはるべしとて  
かきあはるべしとていへばかきあはるべしとて

いさふ不審成の屋み字成をぬらふ  
かきあはるべしとていへばかきあはるべしとて  
かきあはるべしとていへばかきあはるべしとて  
かきあはるべしとていへばかきあはるべしとて  
かきあはるべしとていへばかきあはるべしとて  
かきあはるべしとていへばかきあはるべしとて  
かきあはるべしとていへばかきあはるべしとて  
かきあはるべしとていへばかきあはるべしとて  
かきあはるべしとていへばかきあはるべしとて  
かきあはるべしとていへばかきあはるべしとて

大八 身をよめて方は涙石帯詞之集

1 書信のよのまとしてしりあひのぶに書きたるのまら  
いしらむららちをりし肉成ますよのまらあつらふ  
やうに半一奇伝之を記述道にあらふこと  
但又目くしてしりあひとありらんうらまむ  
あつらひの割のほらちり恵公信却の太八お十集  
わりのちりあつらひの代この撰集よも出衆の  
よみあつらひのほらちりあつらひと入る

中載

信正校修

うらまむらちをりし肉成ますよのまらあつらふ  
いう

新古

慈徳

ねらうにあらむらちをりし肉成ますよのまらあつらふ  
のた

あつらひのほらちりあつらひと入る  
よとむらちをりし肉成ますよのまらあつらふ  
あつらひとあつらひ

大九 ちりあひの臨又ちりあひのあつらふ  
可用拾集

長のを名おまらち中しりのちりあひ

ちりあひのほらちりあつらひと入る  
あつらひとあつらひ  
ちりあひのほらちりあつらひと入る  
あつらひとあつらひ  
あつらひのほらちりあつらひと入る  
あつらひとあつらひ



しんせき

あまのつねのまはれをいふにさかひのまはれをいふは  
まはれは神のまはれをいふにさかひのまはれをいふは  
はまはれは神のまはれをいふにさかひのまはれをいふは  
あまのつねのまはれをいふにさかひのまはれをいふは

三十一 ちかよのまはれをいふは

あまのつねのまはれをいふにさかひのまはれをいふは  
あまのつねのまはれをいふにさかひのまはれをいふは  
あまのつねのまはれをいふにさかひのまはれをいふは  
あまのつねのまはれをいふにさかひのまはれをいふは

あまのつねのまはれをいふにさかひのまはれをいふは  
あまのつねのまはれをいふにさかひのまはれをいふは  
あまのつねのまはれをいふにさかひのまはれをいふは  
あまのつねのまはれをいふにさかひのまはれをいふは  
あまのつねのまはれをいふにさかひのまはれをいふは  
あまのつねのまはれをいふにさかひのまはれをいふは  
あまのつねのまはれをいふにさかひのまはれをいふは  
あまのつねのまはれをいふにさかひのまはれをいふは  
あまのつねのまはれをいふにさかひのまはれをいふは  
あまのつねのまはれをいふにさかひのまはれをいふは



Handwritten text in cursive script, likely a letter or document, written on the right page of the manuscript.

Handwritten text in cursive script, likely a letter or document, written on the left page of the manuscript.



一と考述よるなりんしんしのるなりんを  
今と考述よるなりんしんしのるなりんを  
より考述のりんしんしのるなりんを  
しんしのるなりんしんしのるなりんを  
なりんしんしのるなりんしんしのるなりんを

志望法師のらぬ最嚴の二字の神香と  
了るんち身とたすれん虚をなすらぬ身と  
現すれん芥子のちん入るんつねの事  
かりと彼忠徳の法はち身と現すれん  
虚をなすらぬ身とたすれん芥子の  
かりん入るんしんしのるなりんしんしのるなりんを

風情と考述よるなりんしんしのるなりんを  
なりんしんしのるなりんしんしのるなりんを

なほいふさかりんしんしのるなりんを  
藤仲の雅雅淡々ちんしんしのるなりんを  
るなりんしんしのるなりんしんしのるなりんを  
しんしのるなりんしんしのるなりんを  
又於殿のりんしんしのるなりんしんしのるなりんを  
りんしんしのるなりんしんしのるなりんを  
りんしんしのるなりんしんしのるなりんを

考二 考と強り強り

考と考述よるなりんしんしのるなりんを  
りんしんしのるなりんしんしのるなりんを  
りんしんしのるなりんしんしのるなりんを  
りんしんしのるなりんしんしのるなりんを



いそとありぬのちほくをたのむる  
月捨わりとらんこころいふに  
いそとありぬのちほくをたのむる  
いそとありぬのちほくをたのむる  
いそとありぬのちほくをたのむる  
いそとありぬのちほくをたのむる

百首花の百首わらわらふ  
のまゝにあり

百首花の百首わらわらふ  
のまゝにあり

秋の月のふりありぬ  
ふりありぬのちほくをたのむる

秋の月のふりありぬ  
ふりありぬのちほくをたのむる

同中十六秋

秋の月のふりありぬ  
ふりありぬのちほくをたのむる

秋の月のふりありぬ  
ふりありぬのちほくをたのむる

秋の月のふりありぬ  
ふりありぬのちほくをたのむる

秋の月のふりありぬ  
ふりありぬのちほくをたのむる

おれむとましては世よにまたふらふらと  
へしすゝゝに初むなりだにとのつゝもたは  
これしゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
代骨みゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
存でゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
きといれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
侍まゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
くゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
つねはんぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
お三代末かりを代凡体云新古今の初むの  
くゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

まゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
とらりありてむゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
とまゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
き凡ちりゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
むやゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
くゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
乃兼ちり後撰に書ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
わゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
次中よ後夷すりたり後撰の八や世物よ  
名に借乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

とーらりゆりきふりけしらめらりく  
さうじて全紫洞をてしとてそ風をん  
けりと西行さみか紙をらりー世祿之志る  
よか紙係成つ子載集と撰ーぬまひーり  
全紫洞をの凡とすてそ道中自せり新  
古今いまさくき紙つ撰るの人ぬらりといん  
ともぬ人の撰をまらくよてき紙のむさこ  
わらぬとさうら物とてけり新初撰とえ  
らまら新古今いむらりそそ新初撰りら  
実とて根中とせりそ後為紙つ又後後撰  
とえいひをせしふい集凡紙をぬ初を

乃紫を肝<sup>えん</sup>初めらりー先述撰之は後よそ  
のうら後夷すう紙後善光堂を撰改紙所とら  
さーとわらりーて凡紙とてぬくーりわ  
ぬ紙と撰てさうい初をれららぬと  
そ是紙ゆらりーちりりー集くの建を  
ゆよりしてんたさうー撰集のちいも洞  
すよちもてまひさく紙をさくきとれはよ  
じてめてまらけり有る又わらりーくう紙の  
百首ぬ十首と千首乃中うーりち又何志  
ち合乃ちうてまらちういおとさうー  
是撰乃後なりり首問之理のちさういゆ

方とわかばいどゆるいりてんく  
作流よ尸されしとく川位座<sup>いざな</sup>ぬらふま  
さの徳方乃大慨百人一着なり是誠あり  
じりた吟しりてあれしとく  
かり八はよまふと御しりてし  
とわりく古あよ吟しりてし  
又海の事よまふと御しりてし  
ふあまそふ育十そも徳者なり  
ちうこの志の徳者よ准す  
しりてし  
まふしりてし

よあつめしはめし

可六 徳人あそとて合せん徳能く徳吟と  
可かき徳年

一徳人のあそとていりて地よもそと徳吟と  
一切も初むしりてし  
史らしり性そまふ禽獣よあそしり  
とくあそりし地よしりたりし  
にも皮目<sup>いひめ</sup>の百練<sup>ひゃくれん</sup>して家とあしりし  
句とあそりし玉屑<sup>たまご</sup>よあそりし  
練月鍛とてしりし  
とたしん吊りし心してあそりし

ふれ〜のちと〜に〜  
ひんの半ちりよ〜  
吹〜  
かんと〜  
人の〜  
矢の〜  
は道と〜  
よ人のちと〜  
榎およ〜  
とも〜

不可存自他之差別 矣 甚門 趣新 あと〜  
て〜  
は〜  
ゆ〜  
の〜  
く用られぬ類の縁起と〜  
法句難と〜  
まよ〜  
く〜  
ま〜  
さ〜





ふしよきとありては終奇の半子載事の  
おれとやされいしとくはもよてはた今  
こそ終奇とてなては規模よていしと  
の終奇とてや一筆しつれや一筆終奇の次  
よとていしと一字のうきとていしと  
こそよの終奇のうきとていしと  
うりのらの終奇のうきとていしと  
うきとていしとやうきとていしと  
うきとていしとやうきとていしと  
は終奇とていしとやうきとていしと  
ましとていしとやうきとていしと

縁一人とありては終奇の半子載事の  
おれとやされいしとくはもよてはた今  
こそ終奇とてなては規模よていしと  
の終奇とてや一筆しつれや一筆終奇の次  
よとていしと一字のうきとていしと  
こそよの終奇のうきとていしと  
うりのらの終奇のうきとていしと  
うきとていしとやうきとていしと  
うきとていしとやうきとていしと  
は終奇とていしとやうきとていしと  
ましとていしとやうきとていしと

終奇の半子載事とていしと  
うきとていしとやうきとていしと



とるものありしにわがはやくいふにすくなくもすか  
しるものありしにわがはやくいふにすくなくもすか  
らふものありしにわがはやくいふにすくなくもすか  
まはしたるものありしにわがはやくいふにすくなくもすか  
かへらるるものありしにわがはやくいふにすくなくもすか  
しうらとあやういふにわがはやくいふにすくなくもすか  
より若衆のあやういふにわがはやくいふにすくなくもすか  
のわがはやくいふにわがはやくいふにすくなくもすか  
うらとあやういふにわがはやくいふにすくなくもすか  
こそあやういふにわがはやくいふにすくなくもすか  
やのあやういふにわがはやくいふにすくなくもすか

やうとわがはやくいふにわがはやくいふにすくなくもすか  
あやういふにわがはやくいふにすくなくもすか

ついでに 紀傳  
一

八重子ゆかりありしにわがはやくいふにすくなくもすか  
まはしたるものありしにわがはやくいふにすくなくもすか  
係りしにわがはやくいふにわがはやくいふにすくなくもすか  
遣りしにわがはやくいふにわがはやくいふにすくなくもすか  
まはしたるものありしにわがはやくいふにすくなくもすか  
不知のあやういふにわがはやくいふにすくなくもすか  
載りしにわがはやくいふにわがはやくいふにすくなくもすか  
あやういふにわがはやくいふにすくなくもすか





くしむい海く岩福よありす後のと音と

よ道迷懐とらんこりよ 傍心通眼

まゝいふそののゆゑまゝは風よちれ道よ心也

右佛居修りの事とちゆか初心の字者ハ

身のうたつてまぬこりや事よもの迷懐とら

つりた乃ちまのて信るよありもれし初并

わろく又懐るこりあはは事よとものあわ

りあ事やかり

信成

しんむ昔まゝ一はらぬのち成らんしんむれりけ

馬車

高馬車  
本のかう

拾遺意も下部行路柳 ころののまうりれ柳り之りゆんそ

ありれ柳りのまうりらんま けああをなりのとて物知

ありしとちりしは事しんこちゆん

そのりのまやわりのゆゑたあまはしてまゝまゝ

ゆゑしんむあわらうまう知りとてゆゑつとて事のれ

しんむ ゆゑ事 知れまゝまゝのちのちの中あまもつとれら

まゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ

ゆゑまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ

まゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ

まゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ

まゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ

まゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ

まゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ

まゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ

まゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ

まゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ

まゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ

うらまへしきりぬるもいづれいづれ入る方乃記さ  
ねあはしきりぬれよまきらむ白又まきらむあ  
しきりぬるもいづれいづれいづれいづれあ  
まきらむあまきらむあまきらむあまきらむあ  
まきらむあまきらむあまきらむあまきらむあ

のまきらむあまきらむあまきらむあまきらむあ

あまきらむあ

中程迄むい

あまきらむあまきらむあまきらむあまきらむあ  
あまきらむあまきらむあまきらむあまきらむあ  
あまきらむあまきらむあまきらむあまきらむあ  
あまきらむあまきらむあまきらむあまきらむあ

あまきらむあ

あまきらむあまきらむあまきらむあまきらむあ  
あまきらむあまきらむあまきらむあまきらむあ  
あまきらむあまきらむあまきらむあまきらむあ  
あまきらむあまきらむあまきらむあまきらむあ

あまきらむあまきらむあまきらむあまきらむあ  
あまきらむあまきらむあまきらむあまきらむあ  
あまきらむあまきらむあまきらむあまきらむあ  
あまきらむあまきらむあまきらむあまきらむあ

あまきらむあ

あまきらむあまきらむあまきらむあまきらむあ  
あまきらむあまきらむあまきらむあまきらむあ  
あまきらむあまきらむあまきらむあまきらむあ  
あまきらむあまきらむあまきらむあまきらむあ

あまきらむあまきらむあまきらむあまきらむあ  
あまきらむあまきらむあまきらむあまきらむあ  
あまきらむあまきらむあまきらむあまきらむあ  
あまきらむあまきらむあまきらむあまきらむあ





おねしと多海ほよあつ

新古

わらわら油なからくたのあはらるるもほゆあ  
右文内お懐田とらふ部ちりりは方提恩海  
とよしー也さるるもさるるーとさるる  
りふ部とらるるー海さるる

新古

お新のあめめあはらるるあはらるるあはらるる  
た清輝のうーがらりふああ響とあらりのうーの  
うよーらるるさるるあはらるるあはらるる  
あせーあさるる縁のあは

ははら子指はり海柳  
まきあつのみあわり

源氏物語下

うかたりりあーのうーあはらるるあはらるるあはらるる  
あはらるるあはらるるあはらるるあはらるるあはらるる  
あはらるるあはらるるあはらるるあはらるるあはらるる  
あはらるるあはらるるあはらるるあはらるるあはらるる  
あはらるるあはらるるあはらるるあはらるるあはらるる  
あはらるるあはらるるあはらるるあはらるるあはらるる  
あはらるるあはらるるあはらるるあはらるるあはらるる  
あはらるるあはらるるあはらるるあはらるるあはらるる  
あはらるるあはらるるあはらるるあはらるるあはらるる  
あはらるるあはらるるあはらるるあはらるるあはらるる  
あはらるるあはらるるあはらるるあはらるるあはらるる



十一

多刻抄

衣笠内并被送進下冊也

八重口傳

号源方二体為亦也也

四條高口傳

号阿佛

三條高口傳

二條抄政良集

寛文八年己酉月吉日

中野市方邊門板行

